

第62回全国学校給食研究協議大会報告

平成23年11月8日~9日 広島県

報告者 渡辺眞美子

<趣旨> 学校における食育を推進する上で重要な役割を担う学校給食の在り方について
研究協議を行い、併せて学校給食関係者の資質の向上を図る。

<主題> 「生きる力」を育む食育の推進と学校給食の充実
~きちんと食べて体と頭を元気に！~

<主催> 文部科学省 広島県教育委員会 広島市教育委員会
全国学校給食会連合会 財団法人広島県学校給食会

文部科学省説明

演題「学校給食の役割と食育の推進について」

文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課 課長 平下文康

平成17年基本プランが策定され、平成18年3月から施行される。学校給食において、早寝早起き朝ごはんを推進しておりますが、朝食の欠食率が5年生で平成12年では4.1%であったが、平成19年は1.6%に減少している。地場産物の使用状況では平成22年は25%、目標は30%である。学校と地場産物農家の連携が大切である。平成21年4月学校給食衛生基準が施行されたので、昨年からは衛生管理と調理技術の調査研究が始まっている。学校給食の未納率は1.2%ある。今年8月子ども手当の改正があり、子ども手当から給食費を引いて支給してよいと法律が改正され、改善されると思われる。

全体会実践発表

「自主的・実践的に食生活を営んでいくことのできる児童の育成」

~学校教育活動全体で食育に取り組むことを通して~

広島市皆実小学校 校長 清水陽子 教諭 植田浩史 栄養教諭 栗本淳子

三つのあ(あいさつ・あんぜん・あさごはん)を基に食育推進に取り組んでいる。まず、残食を無くそうという取り組みから、平成15年度の残食率は年平均7.5%が平成16年には3%に漸減している。家庭における食生活においては「主食・主菜・副菜がそろった朝ごはんを食べているか」等のアンケートを実施し、改善に努めている。また地場産物の摂取にも積極的に取り組んでいる。また、教職員の共通理解を深めるために、平成22年6月は、給食委員会の活動を児童とともに担任が体験する。さらに8月には、担任が給食への総合的理解を深めるために、栄養教諭、給食調理員が作業工程や衛生管理について説明した。平成23年8月には、地場産物を使った給食メニューを担任が実際に給食室で作るという体験的研修を取り入れた。

<成果と課題> 残食率は平成22年11月から3月までの平均は1.8%と半減した。平成23年年度から6年生がリーダーシップをとり、自主的に「残食0運動」を立案、実施している。朝食時の野菜摂取の調査では平成23年6月は72.6%と全市平均の50.9%に比べ、大きく上回った。

特別講演

演題「子どもの時からの生活習慣病対策」

～成長期の食習慣が次世代の健康を決める！？～

早稲田大学総合研究機構 研究院教授・上級研究員 福岡秀興 先生

思春期の栄養

- (1) 思春期は将来の健康確保に大切な時期・・・「成長の窓」が開くのは特定の時期のみ
- (2) 一生の食習慣を決定する時期
- (3) 思春期の栄養が次世代に影響する・・・3世代続くといわれている。

NAASH 平成19年度児童生徒の食事状況等調査によると

- (1) エネルギー不足、鉄、食物繊維不足
- (2) カルシウムは給食が無い日は65～70%になっている。
- (3) 充足しているのは、ビタミン、脂肪

女性の骨の成長は思春期に作られる。

8歳から徐々に増え、15歳で完成する。

女子のCa年間増加量は16歳ではマイナスになる。

十二指腸でCaは吸収され、そのとき、ビタミンDがCa吸収を調節しているので、ビタミンDは重要である。現在、日本ではくる病が増えている。母乳で育ち、日光に当たらない人が可能性がある。ビタミンDは太陽に当たって皮膚で作られる。ビタミンDは知能、免疫系に関与している。日光に当たる時間は、真夏では15分、冬でも30分でよい。

第8分科会 衛生管理の在り方

研究主題 学校給食の施設・設備を改善し、衛生管理を徹底するためには、どのようにしたらよいか。

研究協議事項

ウェットシステムの調理上におけるドライ運用の進め方

作業工程表、作業動線図等関係諸帳簿の作成の在り方

学校給食施設設備の改善の進め方

学校給食施設従事者等に対する衛生管理のための検収の在り方

児童生徒に対する衛生管理の在り方

研究発表が3題ありました。

それに対する質疑応答がありました。

<感想>・熱風消毒庫についての知識不足

- ・手洗いにオスバンを使っているところがあり、現在使用禁止である。
- ・除湿機やスポットクーラー等利用しているが、良いのか。
- ・ドライシステムの維持、ドライ運用についての認識があるか。
- ・保健所が監視しているが、部長まで報告がされていなくて、事故が起きて始めて改善される状況である。